

## 農学生命科学研究科全体の取組について

中西 友子

東京大学大学院農学生命科学研究科食の安全研究センター特任教授

福島の原子力発電所事故からはや6年が過ぎました。今でも被災地から避難されている人はおよそ8万人もおられ、その内、1万人以上が今でも仮設住宅で暮らしている状況です。避難区域の人口はかつての4分の1に減少し、住民の方が再び戻ってこられるかが問題となっています。私たちは、避難された方が戻ってこられても安全にまた農業をできるのかを知るための、最も頼りになる情報が現場の科学的情報だと考え、調査研究とその報告を続けています。

現在、現場で問題になる放射性核種は放射性セシウム( $^{137}\text{Cs}$ )です。事故当初はこの核種がどこにあるのかが問題となり、私共は環境中の動植物や土壌、水も含め、あらゆるものについてその放射線量を測定してきました。そして $^{137}\text{Cs}$ が時間の経過と共にどのように動くのかについても調べてきました。

降ってきた $^{137}\text{Cs}$ の大部分は、森林も含め多くの場所で土壌表層に強く吸着されています。そのため除染法として表土を除去する工事が行われてきましたが、表土が無くなった畑で作物はうまく育たないのです。またその表土の扱いも問題となっています。福島県は7割が森林で占められているのですが、森林現場における放射能汚染についてはまだあまり知見が得られていないかと思えます。そこで、今回は、放射能汚染について多くの方が関心を持たれている森林域を中心に、土壌や河川について、また空気中の $^{137}\text{Cs}$ の飛散も含め、判ってきたことを紹介します。

2011年から始まった私たちの福島に関する調査研究の報告会も今回で第14回目となりました。私たち農学部の教員は、事故直後から現場の農業に資するための放射能影響調査研究を続けて参りましたが、自然相手の研究でもあり、6年経ってやっと少し連続的なデータが取得できてきたところです。

私共は福島の事故に関連する調査研究の結果を纏め、色々な形で書籍として出版していますが、今回、新たに東京大学出版会からも出版させていただきました。

英語版の方は、以下のサイトから無料でダウンロードできます。初本は110万回ものダウンロード数となり、出版元のSpringer社から礼状が届きました。

“Agricultural Implications of Fukushima Nuclear Accident” (Springer社より)

(2013) : <http://www.springer.com/us/book/9784431543275>

(2016) : <http://www.springer.com/us/book/9784431558262>

(2013) 「土壌汚染」: NHKブックス (中西友子)

(2017) 「原発事故と福島の農業」: 東京大学出版会 (根本圭介)

私たちはこれからも継続的に放射能汚染についての調査研究を続けていくつもりですので、何卒宜しくお願いいたします。